地域づくりに大切なこと
「国際地域イノベーター人材養成プログラム」を学ぶ意義と大学教育

北海道教育大学函館校
キャリアセンター相談員 根 本 直 樹

私の仕事は、市立函館博物館からスタートしました。そこで学芸員として働いていた際に市民などから批判を3度受けたことがあります。

一つ目は、最初に企画した『目で見る町並み散歩』展で見学者から「他の町の宣伝をしてどうする気だ」との意見でした。函館の町並みを考える際に比較として他の町並みを紹介したのですが、その意図が理解されませんでした。

二つ目は、初めての市民講座『商いの顔を調べよう』に対して、受講者が「学芸員は私たちに知識を与えるのが仕事であって、一緒に調べるとはおかしい」との意見でした。博物館は市民との学び合いによって活性化するとの意識からでしたが、双方向性の学びは少し早かったのかもしれません。

三つ目は、当時、博物館利用者の少なさに疑問をもっていたので百貨店などの経営に関心があり、自主研修で調査を実施しました。その際に得た考えを学芸員が集まる研修会で発言したら「まじめにやってください」とお叱りを受けました。当時は「博物館経営論」などの科目が資格取得に含まれていませんでした。これらは今から30年以上も昔の出来事です。

最近の博物館等の動向は、2015年ユネスコの勧告では、「ミュージアムは社会全体に語りかけるゆえに社会的繋がりと団結を築き、市民意識の形成また集団的アイデンティを考える上で、重要な役割を持つ重要な公共空間である」と書かれています。

文化審議会の答申（2018）によると博物館などの文化施設は、「教育機関・福祉機関・医療機関等の関係団体と連携してさまざまな社会的課題を解決する場としてその役割を果たすことが求められている」ことや、OECD（経済協力開発機構）とICOM（国際博物館会議）が2019年に地方政府に向けて、「文化的価値の保存と創造だけでなくミュージアムの社会的便益、観光や経済、産業への波及効果の大きさを十分に認識し、積極的な支援や投資を行うべき」と提言しています。

これらの動向から、博物館のこれまでの役割を踏まえながら新たな発信力が求められていることが理解できます。私が若い時に実践したことが当時としては違和感をもたれていたのが、現在においては違った評価として捉える事も可能です。

地域づくりで大切なのは、これまでの“普通”に対し疑いをもつことです。とかく事業は同じことの繰り返しになりがちで、提供者の論理で実践される危険性もあります。地域住民との関係性から事業を構築していくことの大切さを忘れがちです。

振り返ると、私が市民との協働を大切にしている理由は、町並みの調査などでお会いした地元の市民との対話や、市民講座・自治体史での市民との共同調査などの現場で学んだことが影響しています。

知識も大切ですが、体で情報を感じることがいかに有益かこのプログラムをとおして学生には学んで欲しいと思いますし、大学教育の表現の一端をこのプログラムをとおして実現してほしいものです。ただ、学び合いの中には前述したような齟齬が起こることにも留意する必要があります。